

茸の舞姫

泉鏡花

青空文庫

「柰さん、これ、何？……」

と小児が訊くと、真赤な鼻の頭を撫でて、

「綺麗な衣服だよ。」

これはまた余りに情ない。町内の柰若どのは、古筵の両端へ、笹の葉ぐるみ青竹を立てて、縄を渡したのに、幾つも蜘蛛の巣を引搦ませて、商売をはじめた。まじまじと控えた、が、そうした鼻の頭の赤いだからこそ可けれ、嘴の黒い鳥だと、そのままの流灌頂。で、お宗旨違の神社の境内、額の古びた木の鳥居の傍に、裕福な仕舞家の土蔵の羽目板を背後にして、秋の祭礼に、日南に店を出している。

売るのであろう、商人と一所に、のほんど構えて、晴れた空の、薄い雲を見ているのだから。

飴は、今でも埋火に鍋を掛けて暖めながら、飴ん棒と云う麻殻の軸に巻いて売る、賑かな祭礼でも、寂びたもので、お市、豆捻、薄荷糖などは、お婆さんが白髪に手

抜を巻いて商う。何でも買いな小父さんは、紺の筒袖を突張らかして懐手の黙然たのみ。景気の好いのは、蜜垂じや蜜垂じやと、菖蒲団子の附焼を、はたはたと煽いで呼ばれる。……毎年顔も店も馴染の連中、場末から出る際商人。丹波鬼灯、海酸漿は手水鉢の傍、大きな百日紅の樹の下に風船屋などと、よき所に陣を敷いたが、鳥居外のは、気まぐれに山から出て来た、もの売で。――

売るのは果もの類。桃は遅い。小さな梨、粒林檎、栗は生のまま……うでたのは、甘藷ととも店が違う。……奥州辺とは事かわつて、加越のあの辺に朱実はほとんどない。ここに林のごとく売るものは、黒く紫な山葡萄、黄と青の山菜蕨を、蔓のまま、枝のまま、その甘渋くて、且つ酸き事、狸が咽せて、兎が酔いそうな珍味である。このおなじ店が、筵三枚、三軒ぶり。笠被た女が二人並んで、片端に頬被りした馬士のような親仁が一人。で、一方の端の所に、件の杓若が、繩に蜘蛛の巣を懸けて罷出た。

「これ、何さあ。」

「美しい衣服じゃが買わんかね。」と鼻をひこつかす。

幾歳になる……杓の年紀が分らない。小児の時から大人のように、大人になっても小児

に齊ひとしい。彼は、元來、この町に、立派な玄關を磨いた医師いしやのうちの、書生兼小使、と云うが、それほどの用には立つまい、ただ大食いの食いそろう客。

世間体にも、容体にも、瘦やせても袴はかまとある処ところを、毎々薄汚れた縞しまの前垂まえだれをメ《し》めていたのは食くい溢こぼしが激しいからで——この頃は人も死に、邸やしきも他のものになった。その医師いしやというの、町内の小児こどもの記憶に、もう可なりの年輩だったが、色の白い、指の細く美しい人で、ひどく権高な、その癩婦おんなのように、口を利くのが優しかった。……細君は、赭あから顔、横ぶとりの肩の広い大円鬚おおまるまげ。眦めじりが下つて、脂あぶらぎつた頬ほおへ、こう……いつでもばらばらとおくれ毛を下げていた。下婢おきんから成上つたとも言うし、妾めかけを直したのだとも云う。実まことの御新造ごしんぞは、人づきあいはもとよりの事、門かど、背戸へ姿を見せず、座敷牢とまでもないが、奥まつた処に籠こもり切きりの、長年の狂女であった。——で、赤鼻は、章魚たことも河童かっぱともつかぬ御難なのだから、待あつかい遇なりも態度も、河原の砂から拾つて来たような体ていであったが、実は前妻のその狂女がもうけた、実子で、しかも長男で、この生れたて変なのが、やや育つてからも変なため、それを気にして気が狂つた、御新造は、以前、国家老の娘とか、それは美しい人であつたと言う……

ある秋の半ば、夕ゆうべより、大雷雨のあとが暴風雨あらしになった、夜の四つ時十時過ぎと思ふ頃、

凄じい電光の中を、蝸が鳴くような、うらさみしい、冴えた、透る、女の声で、キイキイ
 と笑うのが、あたかも樹の上、雲の中を伝うように大空に高く響いて、この町を二三度、
 四五たび、風に吹廻されて往來した事がある……通魔がすると恐れて、老若、呼吸をひ
 そめたが、あとで聞くと、その晩、齋木（医師の姓）の御新造が家を拔出し、町内を彷徨
 つて、疲れ果てた身体を、社の鳥居の柱に、黒髪を颯と乱した衣は鱗の、膚の雪の、電
 光に真蒼なのが、滝をなす雨に打たれつつ、怪しき魚のように身震して跳ねたのを、
 追手が見つけて、医師のその家へかつき込んだ。間もなく柩という四方張の俎に載せて焼
 かれてしまった。齋木の御新造は、人魚になった、あの暴風雨は、北海の浜から、潮が迎
 いに来たのだと言った——

その翌月、急病で齋木国手が亡くなった。あとは散々である。代診を養子に取立てて
 あつたのが、成上りのその肥満女と、家蔵を売って行方知れず、……下男下女、薬局
 の輩まで。勝手に掴み取りの、鼻に枯葉で散り散りばらばら。……薬臭い寂しい邸は、冬
 の日売家の札が貼られた。寂とした暮方、……空地の水溜を町の用心水にしてある
 掃溜の芥棄場に、枯れた柳の夕霜に、赤い鼻を、薄ぼんやりと、提灯のごとくぶ
 ら下げて立っていたのは、屋根から落ちたか、杳若どの。……親は子に、杳介とも杳蔵

とも名づけはしない。待て、御典医であつた、彼のお祖父じいさんが選んだので、本名は杵もく之丞じようだそうである。

——時に、木の鳥居へ引返そう。

二

ここに、杵若がその怪しげなる蜘蛛くもの巣を拵くげている、この鳥居の向うの隅、以前医師の邸の裏門のあつた処に、むかし番太郎と言つて、町内の走り使人つかい、斎とき、非時の振廻りふれまわ、香こう 奠でんがえしの配歩くばり行き、秋の夜番、冬は雪搔かきの手伝いなどした親仁おやしが住んだ……半ば立腐りの長屋建て、掘立小屋ほったてこやという体ていなのが棟むねある。

町中が、杵若をそこへ入れて、役に立つ立たないは話の外で、寄合持よあひで、ざつと扶持ふちをしておくのであつた。

「杵さん、どこから仕入れて来たよ。」

「縁ひの下か、廂あわい合あかな。」

その蜘蛛の巣を見て、通と 掛かりりのものが、苦笑いしながら、声を懸けると、……

「違います。」

と鼻ぐるみ頭を掉^ふつて、

「さとかからじや、ははん。」と、ほんと鼻を鳴らすような咳^{せきばらい} 払^いをする。此奴^{こいつ}が取澄^とましていかにも高慢^{こうまん}で、且つ翁^{おきな}寂^{じやく}びる。争^{まが}われぬのは、お祖父^{おぢい}さんの御典^{ごてん}医^いから、父典^{ちちてん}養^{やう}に相^あ伝^{でん}して、脈^いを取^とつて、ト小指^{こさし}を刎^はねた時の容^{よう}体^{たい}と少しも変^からぬ。

杳^{やう}若^{じやく}が、さとと云^いうのは、山^{やま}、村里^{むら}のその里^{さと}の意^い味^みでな^い。註^{しゆ}をすれば里^{さと}よりは山^{やま}の義^ぎで、字^{あざな}に頭^{あたま}せば故^{ふる}郷^{さと}にな^る……実^{じつ}家^かにな^る。

八九年^{せん}前^{ぜん}晚^{ばん}春^{しゆん}の頃^{ころ}、同^{どう}じこの境^{さかい}内^{うち}で、小兒^{こども}が集^{あつ}つて風^{かぜ}を揚^{たか}げて遊^{あそ}んでいた——杳^{やう}若^{じやく}は願^{ねが}ひの大きい坊^{ぼく}主^{しゆ}頭^{あたま}で、誰^{たれ}よりも群^{ぐん}を抜^ぬいて、のほんと脊^せが高^{たか}いのに、その揚^{たか}げる風^{かぜ}は糸^{いと}を惜^{おし}んで、一番^{いちばん}低^ひく、山^{やま}の上^{うへ}、松^{まつ}の空^{そら}、桐^{きり}の梢^{こずえ}とある中に、わづかに百^{ひゃく}日^{にち}紅^{こう}の枝^{えだ}とすれすれな所^{ところ}を舞^まつた。

大風^{たいふう}来^きい、大風^{たいふう}来^きい。

小風^{せうふう}は、可^い厭^や、可^い厭^や……

幼^{わか}い同^{どう}士^しが威^い勢^{せい}よく唄^{うた}う中に、杳^{やう}若^{じやく}はただ一人^{ひとり}、寒^{さむ}そうな懐^{ふと}手^て、糸^{いと}巻^まを懐^{ふと}中^{ちゆう}に差^さ込^こんだま^ま、この唄^{うた}にはむずむずと襟^{えり}を摺^すつて、頭^{かぶり}を掉^ふつて、そして面^{つら}打^{うち}つて舞^まう己^{おの}が風^{かぜ}に、

合点合点をして見せていた。

……にもかかわらず、烏が騒ぐ逢魔おうまが時、颯さつと下した風も無いのに、杳若やうじやくのその低い風が、懐の糸巻をくるりと空に巻くと、キリキリと糸を張って、一ツ星に颯さつと外それた。

「魔が来たよう。」

「天狗てんぐが取ったあ。」

ワツと怯おびえて、小児こどもたちの逃散にげさんの中を、団栗どんぐりの転がるように杳若やうじやくは黒くなって、風の影をどこまでも追掛おっかけた、その時から、行方知れず。

五日目のおなじ晩方に、骨ばかりの風を提ひげて、やっぱり鳥居際にぼんやりと立っていた。天狗てんぐに攫さらわれたという事である。

それから時々、三日、五日、多い時は半月ぐらい、月に一度、あるいは三月に二度ほどずつ、人間界に居なくなるのが例年で、いつか、そのあわれな母のそうした時も、杳若やうじやくは町には居なかつたのであつた。

「どこへ行つてござつたの。」

町の老人が問うのに答えて、

「実家さとへだよ。」

と、それ言うのである。この町からは、間に大川を一つ隔てた、山から山へ、峰続きを分入るに相違ない、魔の棲むのはそこだと言うから。

「お実家はどこじや。どういふ人が居さつしやる。」

「実家の事かねえ、ははん。」

スポンと栓を抜く、件の咳を一つすると、これと同時に、鼻が尖り、眉が引釣り、額の皺が縊れるかと凹むや、眼が光る。……歯が鳴り、舌が滑に赤くなって、滔々として弁舌鋭く、不思議に魔界の消息を洩す——これを聞いたものは、親たちも、祖父祖母も、その児、孫などには、決して話さなかつた。

幼いものが、生意気に直接に打撞る事がある。

「柰やい、実家はどこだ。」

「実家の事かい、ははん。」

や、もうその咳で、小父さんのお医師さんの、膚触りの柔かい、冷りとした手で、脈所をぎゅうと握られたほど、悚然とするのに、たちまち鼻が尖り、眉が逆立ち、額の皺が、ぴりぴりと蠢いて眼が血走る。……

聞くどころか、これに怯えて、ワツと遁げる。

「実家はな。」

と背後うしろから、蔽おほわれかかつて、小児こどもの目には小山のごとく追って来る。

「御免なさい。」

「きやつ！」

その時に限っては、杵若の耳が且つ動くと言う——嘘を吐つけ。

三

海、また湖へ、信心の投網とあみを颯さつと打って、水に光るもの、輝くものの、仏像、名剣を得たと言つても、売れない前さきには、その日一日の日当がどうなった、米は両につき三升、とこのだから、かくのごとき杵若が番太郎小屋にただぼうとして活いきているだけでは、世の中が納まらぬ。

入費は、町中持合いとした処で、半ば白痴はくちで——たといそれが、実家さとと言う時、魔の魂が入替るとは言え——半ば狂きちがい人であるものを、肝心火の元の用心は何とする。……炭団たどん、埋火うずみび、楮ほだ、柴しばを焚たいて煙は揚げずとも、大切な事である。

方便な事には、杳若は切佩の一件で、山に実家を持って以来、いまだかつて火食をしない。多くは果物を餌とする。松葉を噛めば、椎なんぞ葉までも頬張る。瓜の皮、西瓜の種も差支えぬ。桃、栗、柿、大得意で、鳥や鳶は、むしゃむしゃと裂いて鱈だし、蝸牛つづろ虫つづろやなめくじは刺身に扱う。春は若草、薺、茅花、つくつくしのお精進……蕪を噛る。牛蒡、人参は縦に啣える。

この、秋はまたいつも、食通大得意、というものは、木の実時なり、実り頃、実家の土産の雉、山鳥、小雀、山雀、四十雀、色どりの色羽を、ばらばらと辻に撒き、廂に散らす。ただ、魚類に至つては、金魚も目高も決して食わぬ。

最も得意なのは、も一つ茸で、名も知らぬ、可恐しい、故郷の峰谷の、蓬々しい名の無い菌も、皮つつみの館ころ餅ぼたぼたと覆すがごとく、袂に襟に溢れさして、山野の珍珠に厭かせたまえる殿様が、これにばかりは、露のようなよだれを垂し、「牛肉のひれや、人間の娘より、柔々として膏が滴る……甘味そのツ。」

は凄じい。

が、かく菌を嗜むせいだろうと人は言った、まだ杳若に不思議なのは、日南では、影形が薄ぼやけて、陰では、汚れたどろどろの衣の縞目も判明する。……委しく言えば、昼

は影法師に肖にていて、夜は明かなのであった。

さて、店を並べた、山菜蕒やまくみ、山葡萄やまぶどうのごときは、この老舗しにせには余り資本が掛からな過ぎ
て、恐らくお錢あしになるまいと考えたらしい。で、精一杯に売るものは。

「何だい、こりや！」

「美しい衣服べべじやがい。」

氏は呆あきれもしない顔して、これは買かいもせず、貰かいもしないで、隣の木の実に小遣こづかい
を出して、枝を蔓つるを提あげるのを、じろじろと流ながしめ、世に伯樂あきなし矣い、とソレ青天井
を向むいて、えへらえへらと嘲あざわら笑うう……

その笑わらいが、日南ひなたに居いて、蜘蛛の巣の影になるから、鳥くちばしが嘴くちばしを開ひらけたか、猫ねこが欠伸あくびをした
ように、人間離れをして、笑の意味をなさないで、ぱくりとなる……

というもので、筵むしろを並べて、笠かさを被かぶつて坐まつた、山菜蕒かん、山葡萄おんなの婦などもが、件くだんのぼや
けさ加減かへんに何となく誘さそわれて、この姿も、またどうやら太陽ひの色いろに朧おぼろ々おぼろとして見える。

蒼あおい空そら、薄雲うすぐもよ。

人の形かたちが、そうした霧きりの裡なかに薄うすいと、可怪あやしや、掠かすれて、明あからには見えない筈はずの、扱しごい
て搦からめた縫もつれ糸いとの、蜘蛛くもの囿いの幻影まぼろしが、幻影まぼろしが。

真綿をスイと繰ったほどに判然と見えるのに、薄紅の蝶、浅葱の蝶、青白い蝶、黄色な蝶、金糸銀糸や消え際の草葉螟蛉、金亀虫、蠅の、蒼蠅、赤蠅。
 羽ばかり秋の蟬、蝸の身の経帷子、いろいろの虫の死骸ながら巢を引撈って来たらしい。それ等が艶々と色に出る。

あれ見よ、その蜘蛛の罠に、ちらちらと水銀の散った玉のような露がきらめく……
 この空の晴れたのに。——

四

これには仔細がある。

神の氏子のこの数々の町に、やがて、あやかしのあろうとてか——その年、秋のこの祭礼に限って、見馴れない、商人が、妙な、異ったものを売った。

宮の入口に、新しい石の鳥居の前に立った、白い幟の下に店を出して、そこに鬻ぐは何等のものぞ。

河豚の皮の水鉄砲。

蘆あしの軸じくに、黒斑くろぶちの皮かわを小袋こぶちに巻いたのを、握にぎつて離はなすと、スポイト仕掛つけで、衝つと水みづが逆さかる。

鰻うなぎは多おほし、また壮さかんに膳ぜんに上あす国くにで、魚市いしは言いうにも及およばず、市内しやん到いたる処ところの魚屋いしやの店みせに、春はるとなると、この怪あやしい魚いしを鬻ひがない処ところはない。

が、おかしな売方ひとつひとつ、一頭ひとつ々々つを、あの鰻うなぎの黄ひればんだ、黒斑くろぶちなのを、ずぼんと裏返うら返しに、どろりと脂あぶらぎつて、ぬらぬらと白しろい腹はらを仰あおむけて並ならべて置おく。

もしただ二つ並ならぼうものなら、切落きりして生々せいしい女の乳房ちちだ。……しかも真ま中に、ズキリと庖丁ばうぢやう目めを入いれた処ところが、パクリと赤黒あかい口くちを開あいて、西施せいしの腹はらの裂目さを曝さらす……

中ちゆうから、ずるずると引出ひ出した、長々ながとある百ひやく腸ちゆうを、巻まかして、束つかねて、ぬるぬると重ねかさねて、白腸しろちゆう、黄腸きわちゆうと称なえて売うる。……あまつさえ、目の赤あかい親仁おやじや、襪はく半纏はんてんの漢おのこ等ら、俗しやくに——云いう腸拾ちゆういが、出刃でん庖丁ばうぢやうを斜しやに構かまえて、この腸ちゆうを切売きりする。

待まちて、我が食通しょくつうのごときは、これに較くらぶれば処女ぢよの膳ぜんであろう。

要いするに、市いち、町ちやうの人は、拳こぶつて、手足てあしのない、女の白しろい胴中どうちゆうを筒切つつぎりにして食くうらしい。

その皮かわの水鉄砲すゐてつぱう。小兒こどもは争あつて買競かいきそつて、手ての腥なまいぐさいのを厭いといなく、参詣さんけい群集ぐんしゆうの隙すきを

見ては、シュツ。

「打上げ！」

「流星！」

と花火に擬て、縦横や十文字。

いや、隙どころか、件の杵若をば侮つて、その蜘蛛の巣の店を打つた。

白玉の露はこれである。

その露の鏤むばかり、蜘蛛の囿に色籠めて、いで膚寒き夕となんぬ。山から嵐す風一

陣。

はや篝火の夜にこそ。

五

笛も、太鼓も音を絶えて、ただ御手洗の水の音。寂としてその夜更け行く。この宮の境内に、階の方から、カタンカタン、三ツ四ツ七ツ足駄の齒の高響。

脊丈のほども惟わるる、あの百日紅の樹の枝に、真黒な立烏帽子、鈍色に黄を交

えた練衣ねりぎぬに、水色のさしぬきした神官の姿一体。社殿の雪洞ぼんぼりも早や影の届かぬ、暗夜やみの中に頭あちわれたのが、やや屈かがみなりに腰ひねを捻ひねつて、その百日紅ひゃくじつこうの梢こすえを覗のぞいた、霧もろうろに朦朧もうろうと火が映うつつて、ほんのりと薄紅うすくれなひさの射さしたのは、そこに焚落たきおとした篝火かがりびの残余なごりである。

この明あかりで、白い襟えり、烏帽子くわぼの紐ひもの縹はないろ色いろなのがほのかに見える。洩紙くろあはたした顔かおに黒痘痕くろあはた、塵ちりを飛ばしたようで、尖とんがった目の光ひかり、髪かみはげ、眉まゆ薄うすく、頬骨ほおこの張はつた、その顔かお容かたちを見みないでも、夜露よるうばかり雨あめのないのに、その高足駄たかあしの音ねで分わる、本田ほんだ撰理せんりと申まをす、この宮みやの社司しゃしで……草履くわじゆか高足駄たかあしの他ほかは、下駄したを穿はかないお神官かみぬし。

小児こどもが社殿しゃでんに遊あそぶ時とき、摺違すれちがつて通とほつても、じろりと一ひと睨にらみをくれるばかり。威いあつて容易たやすく口くちを利きかぬ。それを可恐こわくは思おもわぬが、この社司しゃしの一子ひとこに、時丸ときまると云いうのがあつて、おなじ悪戯いたずらざかり盛さかであるから、ある時とき、大勢いくさが軍いくさごつこの、番ばんに当あつて、一子時丸ひとこときまるが馬うまになつた、叱しつ！ 騎やっつた奴やつがある。……で、廻廊まわらうを這はつた。

大喝たいかく一声いつせい、太鼓たいこの皮かわの裂ひけた音ねして、

「無礼むれいもの！」

社務所しゃむしょを虎とらのごとく猛然まげんとして頭あちわれたのは撰理せんりの大人おとなで。

「動わめ！」と喚わめくと、一子時丸ひとこときまるの襟首えりくびを、長袖ながそでのまま引ひつつか、掴つかみ、壇さかしまを倒たれに引落ひし、ずるずる

と広前を、石の大鉢の許に掴み去つて、いきなり衣帯を剥いで裸にすると、天窗から柄杓で浴びせた。

「塩を持って、塩を持って。」

塩どころじやない、百日紅の樹の前にした、社務所と別な住居から、よちよち、臀を横に振つて、肥った色白な大円鬚が、夢中で駈けて来て、一子の水垢離を留めようとして、身を楯に逸るのを、仰向けに、ドンと蹴倒いて、

「汚れものが、退りおれ。——塩を持って、塩を持てい。」

いや、小児等は一すくみ。

あの顔一目で縮み上る……

が、大人に道德というはそぐわぬ。博学深識の従七位、花咲く霧に烏帽子は、大宮人の風情がある。

「火を、ようしめせよ、燠が散るぞよ。」

と烏帽子を下向けに、その住居へ声を懸けて、樹の下を出しなの時、

「雨はどうじゃ……ちと曇つたぞ。」と、密と、袖を捲きながら、紅白の旗のひらひらする、小松大松のあたりを見た。

「あの、大旗が濡れてはならぬが、降りもせまいかな。」

と半ばつぶや吹き吹き、颯さつと巻袖まきそでの笏しやくを上げつつ、とこう、石の鳥居かなたの彼方かなたなる、高き帆柱ほんちゆうのごとき旗はた棹せうの空を仰ぎながら、カタリカタリと足駄あしだを踏んで、斜めに木の鳥居かなたに近づくと、や！ 鼻はなの提ちよう灯ちん、真赤まつかな猿さるの面つら、飴屋あめや一軒、犬も居おらぬに、杓しやく若わが明あきかに店みせを張はつて、暗くらがりりに、のほんとしている。

馬鹿ばかが拍か手しを拍うつた。

「御前ごぜん様さま。」

「杓しやくか。」

「ひひひひひ。」

「何なにをしておる。」

「少しも売うれませぬわい。」

「馬鹿ばかが。」

と夜陰よかげに、一つ洞穴ほらを抜ぬけるような乾からびた声こゑの大音おとで、

「何なにを売うるや。」

「美しい衣服いぶくだがのう。」

「何？」

暗を見透かすようにすると、ものの静かき、松の香が芬とする。

六

鼠色の石持、黒い袴を穿いた宮奴が、百日紅の下に影のごとく踞まつて、びしやツびしやツと、手桶を片手に、箒で水を打つのが見える、と……そこへ――

あれあれ何じや、ばばばばばば、と赤く、かなで書いた字が宙に出て、白い四角な燈が通る、三箇の人影、六本の草鞋の脚。

燈一つに附着合つて、スツと鳥居を潜つて来たのは、三人齊しく山伏なり。白衣に白布の顛巻したが、面こそは異形なれ。丹塗の天狗に、緑青色の般若と、面白く鼻の黄なる狐である。魔とも、妖怪変化とも、もしこれが通魔なら、あの火をしめす宮奴が気絶をしないで堪えるものか。で、般若は一挺の斧を提げ、天狗は注連結いたる半弓に矢を取添え、狐は腰に一口の太刀を佩く。

中に荒縄の太いので、笈摺めかいて、灯した角行燈を荷つたのは天狗である。が、

これは、勇しき男の獅子舞、媚なまめかしき女の祇園囃子ぎおんばやしなどに斉しく、特に夜よに入いつて練歩行ねりあるく、祭の催物の一つで、意味は分らぬ、（やしこばば）と称となる若連中のすさみである。それ、腰にさげ、帯にさした、法螺ほらの貝と横笛に拍子を合せて、

やしこばば、うばば、

うば、うば、うばば。

火を一つ貸せや。

火はまだ打たぬ。

あれ、あの山に、火が一つ見えるぞ。

やしこばば、うばば。

うば、うば、うばば。

……と唄う、ただそれだけを繰返しながら、矢をはぎ、斧を舞わし、太刀をかざして、頤あごから頭なりに、首を一つぐりと振つて、交かわる交がわるに緩く舞う。舞果てると鼻なの尖さきに指を立てて臨兵闘者りんべいとうしやうんぬん云々と九字を切る。一体、悪魔を払う趣意だと云うが、どうやら夜陰よかげのこの業ぎ体たいは、魍魅ちみ魍魎もうりょうの類を、呼出し招き寄せるに髣髴ほうふつとして、実は、希有けぶに、怪しく不気味なものである。

しかもちと来ようが遅い。渠等は社の抜裏の、くらがり坂とて、穴のような中を抜けてふとここへ頭れたが、坂下に大川一つ、橋を向うへ越すと、山を屏風に繞らした、翠帳紅圍の衢がある。おなじ時に祭だから、宵から、その軒、格子先を練廻って、ここに時おくれたのであろう。が、あれ、どこともなく瀬の音して、雨雲の一際黒く、大なる蜘蛛の浸んだような、峰の天狗松の常燈明の一つ灯が、地獄の一つ星のごとく見ゆるにつけても、どうやら三体の通魔めく。

渠等は、すつと来て通り際に、従七位の神官の姿を見て、黙って、言い合せたように、音の無い草鞋を留めた。

この行燈で、巢に搦んだいろいろの虫は、空蟬のその羅の柳条目に見えた。灯に蛾よりも鮮明である。

但し異形な山伏の、天狗、般若、狐も見えた。が、一際色は、杳若の鼻の頭で、「えら美しい衣服じやろがな。」

と蠢かいて言つた処は、青竹二本に渡したにつけても、魔道における七夕の貸小袖と
いう趣である。

従七位の摂理の太夫は、黒痘痕の皺を歪めて、苦笑して、

「白痴たわけが。今にはじめぬ事じゃが、まずこれが衣類ともせい……どこの棒杭ぼうぐいがこれを着るよ。余りの事ゆえ尋ねるが、おのれとても、氏子の一人じゃ、こう訊くのも、氏神様の、

「と敵おごそかに袖しやくに笏しやくを立てて、

「恐多いが、思おぼしめし召おぼしめしじやとそう思え。誰が、着るよ、この白痴たわけ、蜘蛛の巣を。」

「綺麗なのう、若い婦人おなごじやい。」

「何。」

「綺麗な若い婦人おなごは、お姫様じやろがい、そのお姫様が着さつしやるよ。」

「天井か、縁の下か、そんなものがどこに居る？」

と従七位はまた苦い顔。

七

李若むしろは筵むしろの上から、古綿くわを啣くわえたような唇あおむを仰向あおむけに反らして、

「あんな事を言つて、従七位様、天井や縁の下にお姫様が居るものかよ。」

馬鹿にしないもんだ、と抵抗面は可かつたが、

「解つた事を、草の中に居るでないかね……」

はたして、言う事がこれである。

「そうじやろう、草の中でのうて、そんなものが居るものか。ああ、何んと云う、どんな虫じやい。」

「あれ、虫だとうよう、従七位様、えらい博識な神主様がよ。お姫様は茸だものをや。……虫だとうよう、あはは、あはは。」と、火食せぬ奴の齒の白さ、べろんと舌の赤い事。

「茸だと……これ、白痴。聞くものはないが、あまり不便じや。氏神様のお尋ねだと思え。茸が婦人か、おのれの目には。」

「紅茸とうようだあね、薄紅うて、白うて、美しい綺麗な婦人よ。あれ、知らつしやんねえがな、この位な事をや。」

従七位は、白痴の毒気を避けるがごとく、笏を廻して、二つ三つ這奴の鼻の尖を払いながら、

「ふん、で、そのおのれが婦は、蜘蛛の巣を被つて草原に寝ておるじやな。」

「寝る時は裸体だよ。」

「む、茸はな。」

「起きとつても裸体だにのう。——」

粧飾めかす時に、薄らうつつと裸体に巻く宝ものの美しい衣服うつくしきものだよ。これは……」

「うむ、天の恵めぐみは洪大じや。茸にもさて、被きるものをお授けなさるじやな。」

「違ちがうよ。——お姫様の、めしものを持って——侍女こしもとがそう言うだよ。」

「何じや、侍女こしもととは。」

「やつぱり、はあ、真ま白しろな膚はだに薄紅うすべにのさした紅茸べにこだあね。おなじものでも位が違ちがうだ。

人間に、神主様も飴屋もあると同一おなじでな。……従七位様は何も知らつしやらねえ。あはは、

松茸まつたけなんぞは正七位の御前ごぜんさま様だ。錦にしきの褥しとねで、のほんとして、お姫様を視ながめておるだ。」

「黙もくれ！ 白痴たわけ！……と、こんなものじや。」

と従七位は、山伏どもを、じろじろと横目に掛けつつ、過言を叱する威を示して、

「で、で、その衣服きものはどうじやい。」

「ははん——姫様ひいさまのおめしもの持て——侍女こしもとがそう言うと、黒い所へ、黄色と紅あか条すじ

の縞しまを持つた女郎蜘蛛の肥えた奴が、両手で、へい、この金銀珠玉だや、それを、その織

込んだ、透通にしきる錦にしきを捧たかげて、赤棟蛇やまかがしと言うだね、燃える炎のような蛇うろこの鱗うろこへ、馬乗りに

乗つて、谷底から駈けて来ると、蜘蛛も光れば蛇も光る。」

と物語る。君がいわゆる実家の話柄とて、喋舌る杳若の目が光る。と、黒痘痕の眼も輝き、天狗、般若、白狐の、六箇の眼玉も赫となる。

「まだ足りないで、燈を——燈を、と細い声して言う、土からも湧けば、大木の幹にも伝わる、土蜘蛛だ、朽木だ、山蛭だ、俺が実家は祭礼の蒼い万燈、紫色の揃いの提灯、さいかち茨の赤い山車だ。」

と言う……葉ながら散つた、山葡萄と山茱萸の夜露が化けた風情にも、深山の状が思われる。

「いつでも俺は、気の向いた時、勝手にふらりと実家へ行くのだが、今度は山から迎いが来たよ。祭礼に就いてだ。この間、宵に大雨のどツとと降つた夜さり、あの用心池の水溜りの所を通ると、掃溜の前に、円い笠を着た黒いものが蹲踞んでいたがね、俺を見ると、ぬうと立つて、すぽんすぽんと歩行き出して、雲の底に月のある、どしや降の中でな、時々、のほん、と立停つては俺が方をふり向いて見い見いするだ。頭からずぼりと黒い奴で、顔は分んねえだが、こつちを呼びそうにするから、その後へついて行くと、石の鳥居から曲つて入つて、こつちへ来ると見えなくなつた——

俺あ家へ入ろうと思うと、向うの百日紅の樹の下に立っている……」
 指した方を、従七位が見返つた時、もうそこに、宮奴の影はなかった。
 御手洗の音も途絶えて、時雨のような川瀬が響く。……

八

「そのまんま消えたがのう。お社の柵の横手を、坂の方へ行つたらしいで、後へ、すたすた。坂の下口で気が附くと、驚かしやがらい、畜生めが。俺の袖の中から、皺びた、いぼいぼのある蒼い顔を出して笑つた。——山は御祭礼で、お迎いだ——とよう。……此奴はよ、大い蕈で、釣鐘蕈と云うて、叩くとガンと音のする、劫羅経た親仁よ。……巫山戯た爺が、驚かしやがって、頭をコンとお見舞申そうと思つたりや、もう、すっこ抜けて、坂の中途の檜の木の下に雨宿りと澄ましてけつかる。」

川端へ着くと、薄らと月が出たよ。大川はいつもより幅が広い、霧で茫として海見たよ。うだ。流の上の真中へな、小船が一艘。——先刻ここで木の実を売っておつた婦のような、丸い笠きた、白い女が二人乗つて、川下から流を逆に泳いで通る、漕ぐじゃねえ。底

蛇と言うて、川に居る蛇が船に乗ツけて底を渡るだもの。船頭なんか、要るものかい、ははん。」

と高慢な笑い方で、

「船からよ、白い手で招くだね。黒親仁は俺を負つて、ぎぶぎぶと流を渡つて、船に乗つた。二人の婦人は、柴に附着けて売られたつけ、毒だ言うて川下へ流されたのが遁げて来ただね。」

ずつと川上へ行くと、そこらは濁らぬ。山奥の方は明るい月だ。真蒼な激しい流が、白く颯と分れると、大な蛇が迎いに来た、でない船が、もうその上は小蛇の力で動かんでな。底を背負つて、一廻りまわつて、船首へ、鎌首を擡げて泳ぐ、竜頭の船と言うだによ。俺は殿様だ。……

大巖の岸へ着くと、その鎌首で、親仁の頭をドンと敲いて、（お先へ。）だつてよ、べろりと赤い舌を出して笑つて谷へ隠れた。山路はぞろぞろと皆、お祭礼の茸だね。坊主様も尼様も交つてよ、尼は大勢、びしよびしよびしよびしよと湿つた所を、坊主様は、すたすたすた乾いた土を行く。湿地茸、木茸、針茸、革茸、羊肚茸、白茸、やあ、一杯だ一杯だ。」

と筵むしろの上を膝で刻んで、嬉しそうに、ニヤニヤして、

「初茸はつたけなんか、親孝行で、夜遊びはいたしません、指を啣くわえているだよ。……さあ、お姫様の踊がはじまる。」

と、首を横に掉ふつて手を敲いて、

「お姫様も一人ではない。侍女こしもとは千人だ。女郎蜘蛛が蛇に乗っちゃ、ぞろぞろぞろぞろみんな衣裳を持つて来ると、すつと巻いて、袖を開く。裾すそを浮かすと、紅玉ルビイに乳が透き、エメラルドエメラルドもも、ダイヤモンドダイヤモンドに股が映る、金剛石に肩が輝く。薄紅うすあかい影、青い隈取りくまど、水晶のような可愛い目、珊瑚さんごの玉は唇よ。揃つて、すつ、はらりと、すつ、袖をば、裳すそをば、碧あゐに靡なびかし、紫に颯さばと捌うすく、薄紅うすあかを翻ひるがえす。

笛が聞える、鼓が鳴る。ひゅうら、ひゅうら、ひゅうら、ツテン、テン、おひやら、ひゅうい、チテン、テン、ひやあらひやあら、トテン、テン。」

廓くるわのしらべか、松風か、ひゅうら、ひゅうら、ひゅうら、ツテン、テン。あらず、天狗の囃子はやしであろう。本若ほんわかの声を遥はるかに呼交す。

「唄は、やしこばばの唄なんだよ、ひゅうらひゅうら、ツテン、テン、

やしこばば、うばば、

うば、うば、うばば、

火を一つくれや……」

と、唄うに連れて、囃子に連れて、少しずつ手足の科した、三個のこの山伏が、腰を入れ、肩を撓め、首を振って、踊出す。太刀、斧、弓矢に似もつかず、手足のこなしは、しなやかなものである。

従七位が、首を廻いて、笏を振って、臀を廻いた。

二本の幟はたと翻り、虚空を落す天狗風。

蜘蛛の囀の虫晃々と輝いて、鏘然、珠玉の響あり。

「幾千金ですか。」

般若の山伏がこう聞いた。その声の艶に媚かしいのを、神官は怪んだが、やがて三人とも仮装を脱いで、裸にして縷無き雪の膚を顕すのを見ると、いずれも、……血色うつくしき、肌理細かなる婦人である。

「銭ではないよ、みんな裸になれば一反ずつ遣る。」

価を問われた時、杵若が蜘蛛の巣を指して、そう言ったからであった。

裸体に、被いて、大旗の下を行く三人の姿は、神官の目に、実に、紅玉、碧玉、金

イヤモンド
 剛石、真珠、珊瑚を星のごとく鑲めた羅綾のごとく見えたのである。

神官は高足駄で、よろよろとなつて、鳥居を入ると、住居へ行かず、階を上つて拝殿に入つた。が、額の下の高麗べりの畳の隅に、人形のようになつて坐睡りをしていた、十四になる緋の袴の巫女を、いきなり、引立てて、袴を脱がせ、衣を剥いだ。……この巫女は、当年初に仕えたので、こうされるのが掟だと思つて自由になつたそうである。

宮奴が仰天した、馬顔の、痩せた、貧相な中年もので、かねて呐であつた。

「従、従、従、従、従七位、七位様、何、何、何、何、何事！」

「笏で、びしやりと胸を打つて、

「退りおろうぞ。」

で、虫の死んだ蜘蛛の巣を、巫女の頭に翳したのである。

かつて、山神の社に奉行した時、丑の時参詣を谷へ蹴込んだり、と告つた、大権威の摂理太夫は、これから発狂した。

——既に、廓の芸妓三人が、あるまじき、その夜、その怪しき仮装をして内証で練つた、というのが、尋常ごとではない。

十日を措かず、町内の娘が一人、白昼、素裸になつて格子から抜けて出た。門から手招

きする杳若の、あの、宝玉の錦が欲しいのであった。余りの事に、これは親さえ組留められず、あれあれと追う間に、番太郎へ飛込んだ。

市の町々から、やがて、木蓮もくれんが散るように、幾人いくたりとなく女が舞込む。

——夜、その小屋を見ると、おなじような姿が、白い陽炎かげろうのごとく、杳若の鼻を取巻いているのであった。

大正七（一九一八）年四月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成6」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年3月21日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第十七卷」岩波書店

1942（昭和17）年1月24日発行

入力：門田裕志

校正：高柳典子

2007年2月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

茸の舞姫

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>